

2017 年度
英文学科
卒業論文の手引

目次

1. 卒業論文とは何か？	
..... 飯野友幸	1
2. 卒業論文の意義と心得	
..... 舟川一彦	3
3. 卒業論文をどう書くか	
..... 安西徹雄	7
4. 卒業論文提出までの準備と助言	
..... 西能史	12
5. 卒業論文の体裁	
.....	15
付録① 2016年度卒業論文注意事項	
付録② 「卒業論文題目届」の見本	
付録③ 「卒業論文計画書」の見本	
付録④ 「卒業論文のプロポーザル」の見本	
付録⑤ 「卒業論文」(日本語論文)の見本	
付録⑥ 「卒業論文」(英語論文)の見本	

卒業論文とは何か？

飯野友幸

卒業論文は、英文学科で学んできたことの総決算であり、卒業するための最後の大きな仕事である。単位数も「6」と大きいので、短時間のうちに小手先でまとめたものでは、試問という難関までを突破することは決してできない（つまり、単位が与えられない）。一年間かけて、じっくり調べ、読み、考え、そして書いてもらいたい。そして、演習その他のレポートより枚数をはるかに多いので、構想を大きく広げる必要があり、担当教員からの指導を受けることなしにはそれは不可能だ。就職活動その他でなかなか進まなくても、遠慮せず、こまめに担当教員と連絡を取ってほしい。

論文であるからには、何かを論じなければならない。当たり前のように聞こえるかもしれないが、最近の傾向として、何かを調べて、まとめさえすれば論文になると思っている学生が少なくない。調べることは基礎的作業であり、それをじっくり読みこみ、分析し、そこから自分の考えを構成し、さらに人が読んでわかるような形に書き表わして行って、はじめて論文となるのである。

一例を示そう。ヘミングウェイの生涯について調べても、それは高校生の自由研究にしかならない。また、ヘミングウェイの『武器よさらば』がどんな小説かを説明しても、それは解説であり、論文にはならない。『武器よさらば』を読み、たとえば戦争と恋愛、公的なものと私的なものの葛藤があるというふうに考えられたなら、それは論文への第一歩となるだろう。さらに同じ作者の『誰がために鐘は鳴る』を読み、そこに異なる戦争観・恋愛観——なにしろ、戦争の質も違えば、主人公の性格も違う——を読みとれるなら、構想はもっと広がり、卒論の骨組みができあがっていく。

また、すでに出版されている本や論文からそのまま写して自分の論文と偽り、提出するケースもたまに見受けるが、文体や論の運びが上手すぎるなどの理由で、大抵の場合はバレるのが関の山だ。もちろん、論じているテキスト（たとえば『武器よさらば』）に関する他の批評家の意見を参考にし、吟味しながら自分の意見をまとめることは必要なのだが、そのとき誰の意見を借りているのか、必ず明記しなければならない。たとえどんなに力足らずと思っても、自分なり

に論じる努力をすれば、必ず認められるはずだ。

以上の点に留意して、卒業論文に取り組んでもらいたい。完成したときの喜びは格別だし、それが自分の分析力・構成力・表現力といったものを必ずや向上させているはずである。卒業後、社会に出たときにも、そういった力が意味を持つことは言うまでもない。

卒業論文の意義と心得

舟川一彦

伝統的なイギリスの大学のひとつでしばらく生活してみて、感心せざるをえないのは、教師たちが実によく働いているということだ。正式に調査したわけではもちろんないが、学生の指導のために使う時間は、もしかすると平均的な日本の大学教師の倍近くにもなるかもしれない。彼らにこれほどの負担を強いる事情はいくつもあるだろうが、そのひとつに、よく知られたテュートリアルという指導形態があることは間違いない。毎週エッセイを準備する学生にとっても、手間ひまのかかるやり方ではある。が、教師が教室に向くのではなく、学生が教師を訪ね、教師が用意した教科書ではなく学生の用意した材料（エッセイ）をめぐって授業が進行する—これは、うまくすれば、学生の能動性を最大限に発揮させる可能性をもった指導形態であることもまた確かだ。

■テュートリアル科目としての卒業論文

およそ教育の方法に万能というものはなく、個人指導にもそれなりの限界があることは誰もが認めるだろう。ついでながら、イギリスの教師たちは、テュートリアルだけでなく講義やセミナー形式のクラスも担当している。その上でなお、手間ひまを厭わず精出す価値のあるのがテュートリアルの仕事だと彼らは考えているのであり、この点で私も彼らに同意しないわけには行かないのである。少なくとも人文系の学科に関する限り、レクチャーやセミナーのほかに、この種の個別的な指導の機会が不可欠だと思う。これには、右に触れた能動性云々の問題もさることながら、実はそれよりもはるかに根本的な次元に属する理由がある。

多少なりとも創造性や主観的な価値判断を必要とする知識の分野は、まずもって研究者が個人であることを要求する。かつての名投手江夏豊氏は「しょせん野球はひとりですもんや」と言ったことがあるそうだが、野球でさえそうなのだから、まして勉強などというものはひとりではなくてはできるものではない。ひとりで読み、ひとりで考えたことだけが身につくのである。大勢で聴く講義や共同作業であるセミナー、読書会と呼ばれるものなどは、そのための刺戟として役立つことはあっても、それに取って代わることはできない。もちろん、われわれの学問に社会的な共有という側面がないというのではない。それどころか、実際、F・R・リーヴィスの本の題名（もとはT・S・エリオット

の言葉だが)を引くまでもなく、文学研究とは高度に共同体的な営みであるとさえ言えるだろう。文学だけではない。いかなる知識も先人による研究作業の蓄積を前提としており、学問そのものは一種の伝統としてある。それを目に見える形にしたものが「研究史」である。学問をするとは、この伝統に参入することにほかならない。しかし、その前段階として、あるいは参入の資格条件として、孤独な勉学の経験と孤独に耐える能力が不可欠なのだ。その意味で、大学の学部レベルの勉学の一環として、いわば「自分ひとりのための勉強をする」経験がカリキュラムの中に用意されているのは、学生にとってきわめて恵まれた状況と言わなければならない。

イギリスの大学とは機構も歴史的背景も異なる日本の大学に、そのような恵まれた状況は望むべくもないが、わずかながらもチュートリアル風の指導をする一学生の立場からすれば、受ける一機会があるとすれば、それは唯一卒業論文の制作をめぐるということになる。そういう観点からすれば、学生と指導者の間に起こる対話の過程そのものが(履修科目としての)「卒業論文」の実質をなすものであり、その成果は、結果として残った数十頁の論文そのものよりも、途上で学生が通過した知的体験の質によって測られるべきだと言ってもよいだろう(ただし、これは成績表に載る評点とはまた別の話である、念のため)。

■アマチュアの態度

このように、卒業論文をできあがった作品としてではなく一種のチュートリアル科目として見ることから、学生と指導者の両方が心がけるべきいくつかの点が浮かび上がってくる。所産よりも思考の過程を重んぜよ。自分自身を納得させるために書け。これを要するに、アマチュアの態度で書けということになる。何ごとによらず、プロとアマチュアの違いは、前者が他人のために結果を求めるのに対して、後者が自分のために過程を楽しむところにあると言ってよいのではないか。職業として野菜を作る人は、消費者の嗜好に合わせて品種を改良し、良質のものをできるだけ多く収穫しようとする。一方、趣味で野菜を作る人は、わずかなりといえども収穫したものを自分の手で育てたがゆえにおいしく食べる。

学問において、プロとアマチュアの違いは、能力の多寡にあるのではない。それはちょうど、相撲において、アマチュアのトップクラスの選手がプロの幕下力士より強いと同じことだ。学問におけるプロとアマチュアの違いは、先ほど言及した学問の共同体への参入の程度としてあらわれる。プロの研究者とは、この共同体内部の人間をいう。彼(女)にとって出発点は研究史である。特定の論題について過去にどのような研究が行なわれ、何がすでに知られ、何がまだ知られていないか、過去の諸説の強味と弱味はどこにあるか—論文とい

う形で自分の見解を表明する前に、これだけのことを確認し、この研究史の中に自分を定位しなければならない。さらに、プロの研究者が義務を負うのは、第一にこの共同体に対してである。彼（または彼女）は新しい知識を提供したり、過去の学説の誤りを訂正することによって、学問の伝統に寄与することを目指さなければならない。したがって、プロの業績はオリジナリティという尺度で評価される。

もちろん、アマチュアの論文といえども、この共同体とまったく無関係でありえないことは言うまでもない。シェイクスピアについて卒業論文を書こうとする学生は、この劇作家について書かれたプロの業績をいくらかは読むだろうし、それによって研究史の少なくとも一端には触れることになるだろう。しかし、もともと「愛する人」を意味するアマチュアがシェイクスピアを論ずるのは、シェイクスピア・インダストリーに貢献するためではない。シェイクスピアについて何か解きたい問題があり、その問題について自分を得心させたいがゆえに論ずるのだ。同じ問題を論じた先人がいるかないかというのは二義的なことにすぎない。アマチュアの論文を評価する第一の基準は、どれだけ自分で考えたかということである。

■学生へのアドバイス

卒業論文をめぐるテュートリアル之眼目は、したがって、自分の頭で物を考える訓練ということになる。しかし、自分の頭で物考えることがいかに難しく、指導がいかに無力であるかを思い知らされるのもまた、このテュートリアルを通してなのだ。先に述べたようなアマチュアリズムを理解している学生は少なく、私の指導によってそれを理解するようになる者はさらに少ないと白状しなければならない。それでも、よきアマチュアになるためのいくつかのポイントがないわけではない。

(一) 手垢のついていない題目を選べ。過去に受けた授業（演習や講義）で扱われた題目・テーマの中から卒業論文の題目・テーマを選ぶ学生が多い。すでにある程度の知識をもっているから手間が省けると思うのだろうか。それとも、それ以上に興味をそそるものを自分で見つけられなかったというのだろうか。いずれにせよ、本当のアマチュアにとって、これは賢明な選択とはいえない。というのは、よい授業であればあるほど、その影響から自由になることはむずかしく、出発点においてすでに学生の視野を限定することになりかねないからである。もしその授業をした教師が卒業論文の指導者でもあったりすれば、学生は「先生のお気に入るように」書くしかなくなってしまうだろう。私自身は、題目の選択の段階からあえて我ひとりの道を行く学生にむしろ好感を抱くのである。

(二) 参考文献は批判の対象としてこそ利用価値がある。学生の多くは、参考文献とは何らかの問題に対する「答」を教えてくれる本のことだと思い込んでいるらしい。引用する時も、「何某も言っているように……」のひとつ覚えだ。この思い込みを捨てるだけで、随分上手に「物を考える」ことができるようになるだろう。実を言えば、一番役に立つ参考書とは、自分が同意できない見解を含んだ文献なのだ。こういう文献を選んで論文中に引用し、批判を加えるようにすれば、とたんに自分の論旨は明確になり、説得力は増すだろう。自分と同じ見解を述べた文献は、アマチュアにとっては不要だと言ってもいいくらいだ。

(三) 「正答」を求めるな。自分の論じている問題にはひとつの正しい答があって、それを誰かが一偉い批評家なり、指導教授なりが一知っているに違いないというのもまた、真面目な学生にありがちな思い込みである。卒業論文のチュートリアルを通じてこの思い込みを払拭できれば、たとえ論文そのものは無残な出来に終わったとしても、この科目を履修した甲斐があったと言えるのではないだろうか。

卒論をどう書くか

安西徹雄

以前英文研究室で助手をつとめていた頃、いったい卒論をどうやって書いたらいいのか、学生諸君からよくいろいろな相談を待ちかけられました。その時の経験をもとにして、卒論の扱い方の ABC みたいなものを箇条書にまとめてみました。ただしこれはあくまで ABC であって、理想的な論文の書き方 XYZ ではないことをあらかじめお断りしておきます。

(1) 卒論とレポートはどうちがうか。

レポートは、与えられた題目について自分の勉強したことをまとめて報告するものです。これにたいして論文は、題目そのものも原則として自分で選び、自分なりの方法を考え、自分で調査し思索して、なんらかの意味で独創的な結論を出すべきものです。独創的といっても、今まで誰も考えつきもしなかったような、という意味でないのは勿論です。結果として特に目新しくはない結論が出たとしても、新しい問題のとらえ方や、資料の新しい解釈なり、新しい論理の展開なり、要するに論文を書いて行く手順の中で、どこかに新しい点のあることが期待されるわけです。要は、自分で考えるということです。

(2) 論文と批評とはどうちがうか。

文学的、創作的批評は、あくまでも自分の感受性を信じて、ある作品を自分はどう感じたか、どう反応したかを率直に告白するものといえるでしょう。この意味で、この種の批評は主観的であり、また主観的であることが要求されるのです。これにたいして論文は客観的でなければならない。つまり、根本には筆者の主観的な文学的感動が出発点となっても、事実としての資料なり、今までの研究成果なりとつき合わせて、客観的な論理の展開という形に組み直さなければならない。単に自分がどう思うかということだけでなく、なぜそう思うか、その根拠を事実在即して示さなければならないわけです。

(3) 題目の大きさはどの位が適当か。

具体的な問題に移りますが、学部の卒論のテーマとして、どの位の大きさが適当でしょうか。「英文学に現われた自然の理念」などというのはやはり大きすぎるでしょう。常識的にいって、大作家の代表作数編というところが適当なの

ではないかと思います。中小の作家の場合、あるいは日本にまだ本格的に紹介されていない作家などの場合には、その作品全体を検討すべきかもしれません。

(4) テーマの立て方

しかし実は題目の大きさということは、論文のテーマをどのように設定するかということと深い関係があります。論文は解説とはちがうのですから、その作家なり作品なりについて、あらゆる面を万遍なく扱う必要はまったくありません。自分の立てた問題に自分で答えるのが論文の趣旨ですから、テーマはできるだけ明確な、具体的、個別的なもののほうがよいのです。つまり「『ジュリアス・シーザー』について」というような漠然とした題名で、この作品のふくんでいるいろいろな問題を、次から次へと、はっきりした脈絡もなく述べ立てるといようなのは感心しない。例えば「『ジュリアス・シーザー』における群衆の意味」というふうにテーマをしっかりしぼって、その観点から作品に切りこんでいくほうが、論文としてはるかにまとまりのあるものができるでしょう。

このようなテーマの取り方をすると、当然、そのテーマが前後の作品の中にどうつながっているかが問題になるでしょう。主題の大きさがテーマの立て方と関係があるといったのはその意味です。つまり、主に取り上げるのは一つの作品としても、テーマを追ってその前後の作品にも考えを及ぼして行く——その程度の大きさと取り扱い方がまず適当だと思います。

(5) どうやってテーマを見つけるか。

これが実はいちばんの問題点で、学生諸君からいちばんよく相談を受けたのもこの点でした。少し詳しく説明しましょう。

今まで、文学史を習ったり、いろいろな作家に触れたりして来たうちで、なんとなく好きな作家、なんとなく興味のある作品というのが、誰でも少なくとも一つ位はあるはずです。まだその作家のものを数多く読んだことがなくてもかまわない。むしろ、これからもっと深く知りたい、もう少し突っこんで調べてみたいと思っている作家でよいのです。おそくとも3年生の後半には卒論のテーマとして誰を取り上げるか決めなければならないのですから、その時期になってまだ迷っているようであれば、その、自分の関心のある作家に思いきって決めるのがよいと思います。

しかし卒論の「テーマ」というのは、単にどの作家を取り上げるかというだけでなく、(4)で述べたように、もう一步突っこんだ具体的なものでなければならない。その意味でのテーマはどうやって見つけるか。

まず、自分が決めた作家の作品群(少なくとも代表的なもの)を、系統的(例えば年代順)に一気に読んでしまうことです。その作家の全体像がうかび上って来

るでしょう。それと同時に、一つ二つ読み進んで行くうちに、持続的に現れるいくつかのモチーフのあることにも気がついて来るでしょう。例えば野生と文明との対立というモチーフがくり返し現われるとか、同じような人間関係のパターンがいつも出て来るとか、その作家が好んで用いる言葉があるとか、なんでもよいのです。そういうことに気がつけば、すぐ作家が好んで用いる言葉があるとか、なんでもよいのです。そういうことに気がつけば、すぐその場でメモを取っておく。さらに作品を読み進んで行くうちに、このモチーフが又しても現われるとか、だんだん変化して行くとか、いろいろの観察が生まれるでしょう。それもメモする。そうやって主要作品を通読しおわるまでには、書きためたメモによって、いくつかのテーマがおのずから姿を取って来るものです。

作品群を通読するかたわら、その作家についての概説的な入門書を読めば、テーマはいっそうはっきりして来るでしょう。例えば、自分で作品の中に見つけた持続的なモチーフが、実はその作家の生涯のある事件に関係があるとか、その時代の社会情勢や文学思潮に広く見られる共通の問題の反映であるとか、そういうことがわかって来れば、テーマそのものも、そのテーマをどう扱うかといったことも、いろいろヒントが得られるでしょう。こうして、徐々にテーマを絞って行くわけです。

さて、テーマが一応はっきりして来たところで、主に取り扱う作品を決め、その作品をもう一度、今度は詳しいメモを取りながらじっくり読み返し、テーマについて考えを深めて行く——そういう手順を踏んで行けばいいのではないのでしょうか。

次に、実際に論文を書いて行く上での問題点をいくつか拾い上げてみたいと思います。

(6) 論文の構成はどうするか。

論文は普通三つの部分、つまり序論、本論、結論で構成されます。(1)で書いたように、自分で設問し、自分でそれに答えるのが卒論の趣旨だとすると、内容的には序論は設問、本論はその展開、結論はそれに対する回答ということになるわけです。

序論では、(4)で説明した意味でのテーマを、できるだけ明確に、具体的に提示すると同時に、なぜ特にそのテーマを取り上げるのか、その理由——言いかえればそのテーマの意義を示すべきでしょう。つまりそのテーマが、今題材としている作品や作家にたいしてどういう意味を持ち、そのテーマを追求することによって、その作品や作家を理解する上でどういう効果が期待できるか——そういうことも簡潔に説明すべきでしょう。(これは、(5)で述べたような方法でテーマを見つけたのならおのずと明らかだと思えます。)このほかに、そのテー

マをどういう手続きで追求して行くのか、つまり方法論、あるいは論文の大体のプログラムを序論で示しておくのがよいと思います。

本論では、テーマを実際に作品に即して検討して行くわけですが、長くなるようなら内容に従って節に分けるとか、二つ以上の作品を扱う場合はそれぞれの作品に一章を当てるなど、応変の工夫をすべきでしょう。

結論の章では、序論で提起した問に明確に答えなければならないわけですが、(3)や(4)で説明した方法で、その作家の作品系列に検討を拡大して行きたい場合には、結論に入る前に、起承転結の「転」に当たる一章を別に設けるほうがよい場合も考えられます。

要するに構成について大事なことは、形式上の章や節の区切りが、内容上の論理の展開の段落と一致するように、よくよく全体を練り上げて行くということです。

(7) 書いて行く上で心がけるべきこと。

(a) あくまで論旨を一貫させる

卒論は、すでにくり返し書いたように、自分で発した問に自分なりの方法論によって答えるものですから、知っていることや考えたことを全部書いてしまいたいという誘惑をしりぞけ、論旨の展開に直接関係のないことはいさぎよく切り捨てる覚悟が必要です。逆に言えば、自分がどうしても言わなければならない点は、みなそれぞれの場所にじっくり組み込めるような論理の展開を工夫すべきです。それでもどうしても納まらない時には、注にまわすとか、付録をつけるとかの方法を考えるべきでしょう。論旨の一貫性を失わないためには、論文の内容を箇条書に整理してみると大いに役立つものです。

(b) まず書きつけてみる

読むべきものを全部読んでしまってから、やおら論文の構想に取りかかるというのは、かならずしも実際的な方法とは言えません。(5)でも触れたように、作品や参考書を読み進んで行くうちにアイデアが浮かんで来たら、その都度その場でメモしておいて、書きためたメモを読み返し、整理し、おぼろげにでも浮かんで来た構想をその段階でとにかく書きつける。箇条書にまとめ直ししてみる。読者にいちばん納得しやすい論理の順序に並べ直す——そんな作業を通じて論文の骨組みを一応組み立てておいて、さらにまた読む、考える、メモする、整理する、骨組みの中に位置づけ、肉づけし、あるいは骨組みを修正する……そういうことをくり返して行くうちに、次第に論文の全体の姿がはっきり浮かび上って来る。そして、締切りとにらみ合わせて、頃合いを見計っていいよいよ最後の仕上げにかかる、といったやり方のほうがうまく行くのではない

でしょうか。単に実際的であるばかりでなく、とにかく紙に書いてみると、自分の論旨の展開の上での飛躍や矛盾やごまかしが、単に頭の中でモヤモヤ考えているよりはっきり現われ、早くチェックできるという大きな長所があるからです。

(8) 参考書をどう扱うか。

学生諸君からいちばん多く質問を受けた点の一つは、どういう参考書を読めばいいのか、あるいは参考書をどう扱ったらいいのかということでした。(そもそもなぜ参考書を読む必要があるのかについては、(2)で説明したことを参照して下さい。)

自分の取り組む作家についてどういう参考書があるかは、概説的な参考書を見れば、たいてい参考文献表が出ているのでわかります。ただ、こういう本に出ている文献表はかならずしも短くはないので、メンターの先生方にご相談して、自分のテーマから言ってこれだけはどうしても読まねばならない本のリストを自分で作る必要があります。

しかし、問題は、むしろこうやって確保した参考書をどう使うかということでしょう。卒論の題目は自分で考えるということです。自分でまず一応のテーマを持った上で読まなければ、いくら参考書を読みあさってみたとところで、雑多な知識や意見が頭の中に流れこんで来るだけで、一つの焦点にピントが合っただけのものではありません。入門書は別として、普通の研究書や批評を読む場合には、まず自分なりの考えをある程度はっきりさせ、その上で、その問題意識をもって取り組むことが大事です。この意味で、参考書を読むというのはその著者との対決だとも言えるでしょう。有力な反対意見に出会ったら、それに照らして自分の考えを十分再検討し、必要があれば修正し、あるいは相手の論拠を批判する。賛成意見であれば、自分と同じ論拠で同じ結論を出しているかどうか、自分が今まで気づいていなかった点を指摘していないかなどを吟味して、自分の論旨の中のしかるべき位置に取りこんで行く——そういう主体的な読み方をすることが大事です。

資料として利用したり、意見を借用した場合は勿論、引用したり言及した書物はすべて注に明記します。論文を書く上での基本的な礼儀だし、自他の責任の所在や限界を明らかにする意味で、これは非常に重要なことです。

以上、卒論の ABC をまとめてみましたが、多少とも参考になれば幸いです。

卒業論文提出までの準備と助言

西能史

卒業論文（以下「卒論」）は、英文学科の必修科目です。論文審査に合格しなければ卒業できません。

卒論の執筆指導には、それぞれの論文の内容に応じて 1 名の教員があたります。審査の一部として、卒論提出後（翌年 1 月中旬）に、原則 2 名の教員（主査・副査）によって口頭試問が行なわれます。

[1、2 年生]

1、2 年生のうち、できるだけ良質な本をできるだけ多く読むこと、英語力をつけることが重要です。

英語、英米文学、英語学、英語教育などに関する本を読んで、卒論で扱う分野を決めます。同時に、狭い範囲に限定せず、多方面の本を読むことも感性や思考力を高めるのには有益です。論文執筆にあたっては、作品、評論など数多くの英文を読む必要がありますから高度な英文読解力も必要です。

2 年生の 1 月頃に、翌年の「演習」（「ゼミ」）で何を受講するかを決めます。この時まで、興味のある分野がある程度決まっているとよいでしょう。例えば、英米文学、英語学、英語教育のいずれに興味があるのか、詩、小説、戯曲のいずれが好きかといったことです。（ただし、「演習」は、抽選科目であるため、希望が叶わないこともあります。）

[3 年生]

3 年生になったら、卒論で扱う対象を徐々に絞ります。進んで教員と相談するとよいでしょう。12 月中旬に最初の「卒論ガイダンス」があり、2 月下旬に「卒業論文題目届」を、3 月中旬に「卒業論文研究計画」を提出します（「卒業論文題目届」と「卒業論文研究計画」の詳細は「卒論ガイダンス」で説明します）。

「卒業論文研究計画」は、できるだけ具体的に書きましょう。過去の英文学科の卒業生の「卒業論文題目一覧」等を参考にして題目を決めてください。テーマ決定や章立てについては、「3. 卒業論文をどう書くか」を参照してください。

卒論は 4 年になってから書くものと思う人も多いかもしれませんが、実は、良質の卒論が書けるかどうかは、4 年になるまでに、どの位の蓄積があるか、どの位準備しているかにかかっているのです。3 年生の後半から 4 年生の前半では

就職活動にかなりの時間を割かなければなりません。教職課程を取っている人には教育実習もあります。4年になってから取りかかろうと思っていると、本当に何もできないうちに時間が過ぎてしまいます。

[4年生]

4月：4年生の始めの「在校生ガイダンス」で卒論メンター（指導教員）が発表されます。すぐにメンターに会い、「卒業論文研究計画」の説明と、春休み中の進捗状況等を伝えます。

この時点では、論文作成にあたっての最低限の準備ができていなければなりません。例えば、文学の場合、対象となる作品は最低1回英文で読んでいること、その作家の生涯、思想などについて一通りの知識を得ていること、他の主要作品もある程度読んでいること、その作家、作品に関する基本的な批評書を読んでいることなどです。

メンターとの面談で論文のテーマについて話し合い、具体的にどのように進めたらよいか指導を受けます。メンターとは連絡を密に取り、進捗状況を伝え、わからないところは早めに質問するようにします。

5月～7月：5、6、7月の3ヵ月間は、最低月一回、個人面談等の卒論指導を受けること。随時、論文中で立証したい内容と章立ての明確化、図書館やデータベースでの資料収集を進めます。

7月末：「卒業論文のプロポーザル」（この『卒業論文の手引』の巻末に見本あり）と第一章の草稿（日本語論文の場合は5,000字程度、英語論文の場合は2,500 words程度）は、春学期試験期間中に学科事務室に提出すること。（5,000字で1～3章の草稿を求める教員もいます。各指導教員の指示に従うこと。）

夏休み中：夏休み中の作業が優れた論文を執筆するための鍵となります。夏休みに作業を行わず10月から本格的に書き始めればよい、などとゆったり構えていると後悔します。焦るばかりで執筆が進まないからです。想像以上に論文執筆には時間がかかるということを肝に銘じておいてください。

10～11月末：各指導教員の指示と指導に従って執筆を進めます。

12月中旬：学事センターと英文学科に1部ずつ卒論を提出します。期日に遅れないようにしてください。1秒でも遅れると受理されません。各教員のmoodleにもファイルを提出します。提出期限は、毎年発行される「履修要覧」の英文学科のページで確認してください。

1月中旬：主査、副査による口頭試問が行なわれ、卒論の成績が決まります。

卒業論文の体裁

■上智大学英文学科の卒業論文(以下、「卒論」)の体裁は、MLA方式に準拠している。MLA方式の規定は詳細で多岐にわたる。本稿では、英語論文と日本語論文にわけて、およそすべての卒論執筆者に関係する規定項目について説明する。基本の説明にとどめるので、卒論執筆者は各自でMLA方式の詳細を下記の書物で確認しておくこと。

Gibaldi, Joseph. *MLA Handbook for Writers of Research Papers*. 7th ed. New York: Modern Language Association of America, 2009.

■本学科の卒論の体裁はMLA方式と一部異なる。本学科の規定、すなわち、以下の説明を優先するように。

■卒論の体裁について何かわからないことがあっても、すぐに教員に尋ねることのないように。必要な情報は必ずどこかに書いてあるはずなので、できるだけ自力で探しだすように心がけること。

■卒論のテーマの選び方や研究の進め方については、本冊子「卒業論文の手引」とあわせて、次の書物の「第2部 論文の書き方」も参照するとよい。有益な指南が含まれている。ただし、あくまで卒論のテーマの選び方や研究の進め方についての参考書とし、体裁については本稿の説明を参照すること。

渡部昇一・安西徹雄・舟川一彦 『論文・レポートの書き方』 スタンダード英語講座 8 東京、大修館書店、1984年。

英語論文

1. 規定枚数
2. 提出方法
3. 構成
4. 書式設定
 - 4.1. 用紙
 - 4.2. フォント
 - 4.3. 行数
 - 4.4. 余白
 - 4.5. ページ番号のつけ方
5. Title-page(とびら)
6. Contents(目次)
7. 斜体表記の統一
8. その他

1. 規定枚数

■卒論を英語で書く場合は、規定語数を 7,000 words 程度とする。規定語数に含まれるのは、Body of text(本文)、Notes(注)、Works Cited(引用文献)である。Title-page(とびら)と Contents(目次)は、規定枚数に数えない。

2. 提出方法

■卒論の完成原稿は、差し替え可能なようにファイルに綴じ、「正」「副」の2冊を用意する(また指導教員の moodle にファイルで提出すること。)差し替え可能な理由は、卒論提出期限から約1ヶ月後に行われる口頭試問で、教員から内容の修正を指示されることがあるからである。「正」は学事センター窓口、「副」は英文学科事務室に提出する。

3. 構成

■卒論の標準的な構成は、下記の通り。

1. Title-page(とびら)
2. Contents(目次)
3. Body of text(本文)

Introduction(序論)

Chapter I, Chapter II . . . (本論 : 第 1 章、第 2 章 . . .)

Conclusion(結論)

4. Notes(注)

5. Works Cited(引用文献)

4. 書式設定

■卒論は、指定された書式に従って書かなければならない。英文学科のホームページにある「卒業論文書式設定」という文書ファイルには、以下に述べる卒論用の設定がされている。「Word」版と「一太郎」版の2種類があるので、好きな方をダウンロードして、そのまま自分の原稿のフォーマットとして使用するとよい。

4.1. 用紙

■A4 サイズの用紙に、コンピューターを用いて書く。ソフトは、マイクロソフト社の「Word」か、ジャストシステム社の「一太郎」を使用する。ちなみに、学内のコンピュータ・ルームで使用可能なソフトは「Word」である。

4.2. フォント

■フォントはTimes New Romanを使用し、フォントサイズは12ポイントにする。

4.3. 行数

■1行につき35字、1ページにつき25行の設定で書く。

4.4. 余白

■上下左右の余白は、左と上に35ミリ、右に25ミリ、下に30ミリの設定にする。左の余白を右の余白よりも多めにとる理由は、卒論を提出する際に原稿の左側をバインダーで綴じることになっているからである。

4.5. ページ番号のつけ方

■Introduction(序論)の最初のページから Works Cited(引用文献)の最後のページまで、下中央に算用数字の連番でページ番号をつける。Title-page(とびら)と Contents(目次)のページにはページ番号をつけない。

5. Title-page(とびら)

■Title-page(とびら)には下記の事項を記載する。具体例として、「卒業論文の見本」を参照せよ。

1. 表題（英語表題と日本語表題の両方）
2. 提出先（大学および学科名）
3. 請求学位名
4. 執筆者氏名（ローマ字表記と漢字表記の両方）
5. 提出年月

6. Contents(目次)

■この『卒業論文の手引き』の巻末の見本を参照せよ。

7. その他

■その他、表記方法、引用方法、省略方法、典拠明記およびかっこ内注記の方法、Works Cited(引用文献)の作成方法等については、*MLA Handbook*(7th Edition)の該当箇所を参照すること。

日本語論文

1. 規定枚数
2. 提出方法
3. 構成
4. 書式設定
 - 4.1. 用紙
 - 4.2. フォント
 - 4.3. 行数
 - 4.4. 余白
 - 4.5. ページ番号のつけ方
5. とびら
6. 目次
7. 本文
 - 7.1. 表記
 - 7.1.1. 人名
 - 7.1.2. 著作物のタイトル
 - 7.2. 引用
 - 7.2.1. 短い引用
 - 7.2.2. 長い引用
 - 7.3. 省略
 - 7.3.1. 引用文が1文の場合
 - 7.3.2. 引用文が複数の文から成る場合
 - 7.3.3. 韻文(詩)の場合
 - 7.4. 「典拠明記」と「かっこ内注記」
 - 7.4.1. 出典の原文を引用しない場合
 - 7.4.2. 出典の原文を引用する場合
8. 注
 - 8.1. 注のつけ方
9. 引用文献
 - 9.1～15. 引用文献リストの作成方法の詳述

1. 規定枚数

■卒論を日本語で書く場合は、規定枚数を 25 ページ程度 (18,000 字程度) とする。規定枚数に含まれるのは、本文、注、引用文献のページ数である。とびらと目次のページ数は、規定枚数に数えない。

2. 提出方法

■卒論の完成原稿は、差し替え可能なようにファイルに綴じ、「正」「副」の 2 冊を用意する (また、指導教員の moodle に、ファイルで提出する。) 差し替え可能にする理由は、卒論提出期限から約 1 ヶ月後に行われる口頭試問で、教員から内容の修正を指示されることがあるからである。「正」は学事センター窓口、「副」は英文学科事務室に提出する。

3. 構成

■卒論の標準的な構成は、下記の通り。

1. とびら
2. 目次
3. 本文
 - 序論
 - 本論： 第 1 章 第 2 章...
 - 結論
4. 注
5. 引用文献

4. 書式設定

■卒論は、指定された書式に従って書かなければならない。英文学科のホームページにある「卒業論文書式設定」という文書ファイルには、以下に述べる卒論用の設定がされている。「Word」版と「一太郎」版の 2 種類があるので、好きな方をダウンロードして、そのまま自分の原稿のフォーマットとして使用するとよい。

4.1. 用紙

■A4 サイズの用紙に、コンピューターを用いて書く。ソフトは、マイクロソフト社の「Word」か、ジャストシステム社の「一太郎」を使用する。ちなみに、

学内のコンピュータ・ルームで使用可能なソフトは「Word」である。

4.2. フォント

■和文フォントはMS 明朝、欧文フォントは Times New Roman を使用し、いずれもフォントサイズは 12 ポイントにする。

4.3. 行数

■1 行につき 35 字、1 ページにつき 25 行の設定で書く。

4.4. 余白

■上下左右の余白は、左と上に 35 ミリ、右に 25 ミリ、下に 30 ミリの設定にする。左の余白を右の余白よりも多めにとる理由は、卒論を提出する際に原稿の左側をバインダーで綴じることになっているからである。

4.5. ページ番号

■序論の最初のページから引用文献の最後のページまで、下中央に算用数字の連番でページ番号をつける。とびらと目次のページにはページ番号をつけない。

5. とびら

■とびらには下記の事項を記載する。具体例として、「卒業論文の見本」の該当箇所を参照せよ。

1. 表題（英語表題と日本語表題の両方）
2. 提出先（大学および学科名）
3. 請求学位名
4. 執筆者氏名（ローマ字表記と漢字表記の両方）
5. 提出年月

6. 目次

■「卒業論文の見本」の該当箇所を参照せよ。

7. 本文

■本文とは、序論、本論、および結論から成り立つ、研究論文の本質的な部分である。以下、卒論の本文における規定を説明する。

7.1. 表記

7.1.1. 人名

- 初出の人名は、フルネームで記す。

シェイクスピア戯曲の翻訳における福田恆存の功績は非常に大きい。

- 初出の外国語の人名には、フルネームの原綴と生没年も付す。表記方法は次の通り。人名+半角丸かっこ+原綴+コンマ+半角スペース+生没年+半角丸かっこ

『トム・ジョーンズ』(Tom Jones, 1749)におけるヘンリー・フィールディング(Henry Fielding, 1707-54)の語り手の特異な性格については、様々な批評がなされてきた。

- ただし、初出の研究書の著者名に生没年を付す必要はない。フルネームの原綴のみでよい。

M. H. エイブラムズ(M. H. Abrams)は、ロマン主義の本質は特殊な想像力観にあると指摘している(12)。

- 上記の例のように、イニシャル(名前の頭文字)の表記方法は、イニシャル+ピリオド+半角スペースとなる。
- すでに言及してある場合、人名は、姓のみを記せばよい。

M. H. エイブラムズ(M. H. Abrams)は、ロマン主義の本質は特殊な想像力観にあると指摘している(12)。しかし、エイブラムズとは異なる見解を示す批評家も少なからずいる。

7.1.2. 著作物のタイトル

- 出版された著作物のタイトルは斜体にする。
- 書物、戯曲、長編詩など、単独で出版された外国語の著作物のタイトルに言及するときは、初出の場合にかぎり、次のように表記する。2重鉤かっこ+原題の

和訳+2 重鉤かっこ+半角丸かっこ+斜体にした原題+コンマ+半角スペース
+出版年+半角丸かっこ

サー・ウォルター・スコット(Sir Walter Scott, 1771-1832)の歴史小説『アイヴァンホー』 (*Ivanhoe*, 1819)は、ヨーロッパ諸国で人気を博した。

■すでに言及してある場合、外国語の著作物のタイトルは、2 重鉤かっこでくくった原題の和訳のみを記せばよい。

サー・ウォルター・スコット(Sir Walter Scott, 1771-1832)の『アイヴァンホー』 (*Ivanhoe*, 1819)は、ヨーロッパ諸国で人気を博した。『アイヴァンホー』は、いわゆる歴史小説であり、中世のブリテン島においてアングロ・サクソン民族とノルマン民族が文化的に融合する過程を描き出している。

■出版されていない著作物、および著作物に収められている個々の作品や論文のタイトルに言及するときは、初出の場合にかぎり、次のように表記する。1 重鉤かっこ+原題の和訳+1 重鉤かっこ+半角丸かっこ+引用符+原題+コンマ+引用符+半角スペース+出版年+半角丸かっこ

ジョン・キーツ(John Keats, 1795-1821)の「ギリシアの古壺のオード」(“Ode on a Grecian Urn,” 1820)の最後の2行については、これまで多くの批評家たちが論じてきた。

*「ギリシアの古壺のオード」は、『レイミア、イザベラ、聖アグネス祭前夜、およびその他の詩集』 (*Lamia, Isabella, The Eve of St. Agnes, and Other Poems*, 1820)という書物に収められている作品の1つ。

■すでに言及してある場合は、1 重鉤かっこでくくった原題の和訳のみを記せばよい。

ジョン・キーツ(John Keats, 1795-1821)の「ギリシアの古壺のオード」(“Ode on

a Grecian Urn,” 1820)の最後の2行については、これまで多くの批評家たちが論じてきた。それゆえ「ギリシアの古壺のオード」は、キーツの詩の中で最もよく知られている作品だと思われる。

- タイトルの中にさらにタイトルや引用が含まれている場合の表記方法については、*MLA Handbook*(7th Edition)の“3. 6. 4. Titles and Quotations within Titles”を参照せよ。

7.2. 引用

- 引用には、短い引用と長い引用の2種類があり、それぞれの場合で引用方法が異なる。

7.2.1. 短い引用

- 短い引用とは、散文なら本文の中で4行以内に収まるもの、韻文(詩)なら本文の中で3行以内に収まるものを指す。短い引用は、本文に組み込む。また、引用文が外国語の場合には、和訳を添える。このとき、たとえ原典の邦訳が出版されていても、引用文は自分で訳さなければならない。表記方法は、次の通り。
1 重鉤かっこ＋引用文の和訳＋1 重鉤かっこ＋半角丸かっこ＋引用符＋引用文＋引用符＋半角丸かっこ

ワットは、フィールディングが「新古典主義の文学的伝統」(“neo-classical literary tradition”) (Watt 239)に属する作家であることを強調している。

- 韻文(詩)の場合、引用文および和訳において、行の切れ目を半角スペース＋半角スラッシュ＋半角スペースで示す。

ハックスリーの『すばらしい新世界』は、シェイクスピアの次の引用に由来する。「人間がこんなにも美しいとは！ああ、すばらしい新世界だわ / こういう人たちがいるとは！」(“How beauteous mankind is! O brave new world / That has such people in’t!”) (*The Tempest*, 5.1.183-84)。

7.2.2. 長い引用

■長い引用とは、散文なら本文の中で5行以上になるもの、韻文(詩)なら本文の中で4行以上になるものを指す。長い引用は、本文から切り離す。また、引用文が外国語の場合は、短い引用と同様に、和訳を付す。表記方法は、次の通り。改行して、左余白から全角3文字分下げし、そこから鉤かっこをつけないで和訳を記し、さらにその後に引用符をつけないで引用文を記載する。

散文の場合：

リーダーは、『嵐が丘』について次のように述べている。

古いことわざに、夜、トーストしたチーズを食べた者は魔王の夢を見るというものがある。『嵐が丘』の作者はあきらかにトーストしたチーズを食べてしまったのだ。このような作品を書いた作者が章を書きおえないうちに自殺しなかったことが不思議である。

There is an old saying that those who eat toasted cheese at night will dream of Lucifer. The author of *Wuthering Heights* has evidently eaten toasted cheese. How a human being could have attempted such a book as the present without committing suicide before he had finished a dozen chapters, is a mystery. (Leader 33)

韻文(詩)の場合：

『夏の夜の夢』には、次のような一節がある。

しかし、キューピッドの矢の落ちた場所を調べて見ると、
矢は西の方の小さな花の上に落ち、
乳のように白かったその花を、恋の痛手で紫に染めてしまった、
乙女たちはその花を惚れ草と呼んだ。
その花を摘んできておくれ。いつかお前に見せた花だ。
その花の汁を眠ったまぶたに塗っておくと、
男も女も、目が覚めて一番最初に見た相手に

ぞっこんになってしまうのだ。
Yet marked I where the bolt of Cupid fell.
It fell upon a little western flower,
Before, milk-white; now purple with love's wound:
And maidens call it 'love-in-idleness.'
Fetch me that flower, the herb I showed thee once;
The juice of it on sleeping eyelids laid
Will make or man or woman madly dote
Upon the next live creature that it sees. (2.1.165-72)

- なお、引用箇所が原文のパラグラフの冒頭に当たる場合、和訳および引用文の1行目をさらに全角1文字分あける。引用文の途中で段落がある場合も同様に、各パラグラフの冒頭を全角1文字分あける。
- 文学作品の引用方法の詳細については、*MLA Handbook*(7th Edition)の“3. 7. 2. Prose”、“3. 7. 3. Poetry”、“3. 7. 4. Drama”を参照せよ。

7.3. 省略の表記方法

- 原文から不必要な部分——語、句、文、あるいはそれ以上——を削除して引用する場合、2つの点に注意しなければならない。第1に、どの部分を省略したのかを明確にする必要がある。第2に、省略後の引用文が文法的に正しい形になるようにする必要がある。

7.3.1. 引用文が1文の場合

- 原文の途中を省略する場合、表記は次の通り。
 - ・引用文においては、省略部分に、ピリオド+半角スペース+ピリオド+半角スペース+ピリオド
 - ・和訳においては、省略部分に、直前の語とスペースを入れずに、全角1マスの3点連結の中心 * 「全角1マスの3点連結の中心」(...)は、文字入力時に「・」のキーを打てば、変換候補の中に出てくる。

原文：

「ヴォルフの最大の業績は、彼の教え子たちであり、さらに言うならば、そ

の教え子たちを介して、直接的にあるいは間接的に、19 世紀ドイツの文献学者たち全員に影響を与えたことである」 (“Wolf’s greatest work were his pupils, and, directly or indirectly, through them the whole school of German philologists of the nineteenth century”) (Pattison 414)。

途中を省略した引用文：

パティソンは、結論において、「ヴォルフの最大の業績は、彼の教え子たちであり、さらに言うならば、その教え子たちを介して...19 世紀ドイツの文献学者たち全員に影響を与えたことである」 (“Wolf’s greatest work were his pupils, and . . . through them the whole school of German philologists of the nineteenth century”) (414)と述べている。

■原文の文末を省略する場合、表記は次の通り。

- ・引用文においては、省略部分に、直前の語とスペースを入れずに、ピリオド+半角スペース+ピリオド+半角スペース+ピリオド+半角スペース+ピリオド
- ・和訳においては、省略部分に、直前の語とスペースを入れずに、全角 1 マス分の 3 点連結の midpoint

パティソンは、結論において、「ヴォルフの最大の業績は、彼の教え子たちである...」 (“Wolf’s greatest work were his pupils. . .”) (414)と述べている。

7.3.2. 引用文が複数の文から成る場合

■1 文、あるいはそれ以上の数の文全部を省略する場合、表記は次の通り。

- ・引用文においては、省略した文の箇所、直前のピリオドから半角スペースを入れて、ピリオド+半角スペース+ピリオド+半角スペース+ピリオド
- ・和訳においては、省略した文の箇所、直前の句点とスペースを入れずに、全角 1 マス分の 3 点連結の midpoint

原文：

古代ギリシアの作品は、その簡素さと、荘厳さと、壮大な総合的精神によって、人間精神に永遠の活力を与える源であり続けるだろう。古代ギリシア人たちが描いた偉大なキャラクターは、わたしたちにとって、遠い過去の舞台上に登場した人物ではなく、古くから面識があり、尊敬し、愛してきた親しい友人である。外界と自己とを美しく調和させるという古代ギリシアの理念がドイツの教育から失われてしまうとすれば、それは大きな過ちだと言わなければならない。なぜなら、古代ギリシア精神とゲルマン精神とのあいだには特殊な類似関係が存在するからだ。

The simplicity, the dignity, the grand comprehensive spirit of their works, will ever make them a source from which the human soul will draw perpetual youth. Those grand old Greek characters are to us not personages displayed upon a remote historical stage, but intimate friends whom we have known and esteemed and loved. The banishment of this ideal from German schools would be the greater mistake, in as much as there is a peculiar affinity between the Greek and the Teutonic mind. (Pattison 374)

1 文全部を省略した引用文：

パティソンの古代ギリシア観の特徴は、次の一節に見て取ることができる。

古代ギリシアの作品は、その簡素さと、荘厳さと、壮大な総合的精神によって、人間精神に永遠の活力を与える源であり続けるだろう。... 外界と自己とを美しく調和させるという古代ギリシアの理念がドイツの教育から失われてしまうとすれば、それは大きな過ちだと言わなければならない。なぜなら、古代ギリシア精神とゲルマン精神とのあいだには特殊な類似関係が存在するからだ。

The simplicity, the dignity, the grand comprehensive spirit of their works,

will ever make them a source from which the human soul will draw perpetual youth. . . . The banishment of this ideal from German schools would be the greater mistake, in as much as there is a peculiar affinity between the Greek and the Teutonic mind. (374)

- ある文の途中から別の文の最後まで省略する場合、表記は次の通り。

ある文の途中から別の文の最後まで省略した引用文：

パティソンの古代ギリシア観の特徴は、次の一節に見て取ることができる。

古代ギリシアの作品は、その簡素さと、荘厳さと、壮大な総合的精神によって、いつまでも源泉であり続けるだろう…。…外界と自己とを美しく調和させるという古代ギリシアの理念がドイツの教育から失われてしまうとしたら、それは大きな過ちだと言わなければならない。なぜなら、古代ギリシア精神とゲルマン精神とのあいだには特殊な類似関係が存在するからだ。

The simplicity, the dignity, the grand comprehensive spirit of their works, will ever make them a source. . . . The banishment of this ideal from German schools would be the greater mistake, in as much as there is a peculiar affinity between the Greek and the Teutonic mind. (374)

7.3.3. 韻文(詩)の場合

- 韻文(詩)の引用を省略する場合、基本的には上述の散文の場合と同様である。

原文：

しかし、キューピッドの矢の落ちた場所を調べて見ると、
矢は西の方の小さな花の上に落ち、
乳のように白かったその花を、恋の痛手で紫に染めてしまった、

乙女たちはその花を惚れ草と呼んだ。

その花を摘んできておくれ、いつかお前に見せた花だ。

その花の汁を眠ったまぶたに塗っておくと、

男も女も、目が覚めて一番最初に見た相手に

ぞっこんになってしまうのだ。

Yet marked I where the bolt of Cupid fell.

It fell upon a little western flower,

Before, milk-white; now purple with love's wound:

And maidens call it 'love-in-idleness.'

Fetch me that flower, the herb I showed thee once;

The juice of it on sleeping eyelids laid

Will make or man or woman madly dote

Upon the next live creature that it sees. (2.1.165-72)

末尾を省略した引用文：

『夏の夜の夢』には、次のような一節がある。

しかし、キューピッドの矢の落ちた場所を調べて見ると、

矢は西の方の小さな花の上に落ち、

乳のように白かったその花を、恋の痛手で紫に染めてしまった、

乙女たちはその花を惚れ草と呼んだ。

その花を摘んできておくれ…。

Yet marked I where the bolt of Cupid fell.

It fell upon a little western flower,

Before, milk-white; now purple with love's wound:

And maidens call it 'love-in-idleness.'

Fetch me that flower. . . (2.1.165-69)

*かっこ内注記の詩行数が原文の詩行数から変更されていることに注意。

■本文から切り離して引用する韻文(詩)の途中 1 行あるいは数行を省略する場合、表記は次の通り。

・引用文においては、詩行のほぼ 1 行分の長さになるようにピリオドと半角スペースを交互に打つ。

・和訳においては、ダッシュ+半角丸かっこ+中略+半角丸かっこ+ダッシュ

*ダッシュ(―)は、文字入力時に「ダッシュ」と打てば、変換候補の中に出てくる。

途中 1 行を省略した引用文：

『夏の夜の夢』には、次のような一節がある。

しかし、キューピッドの矢の落ちた場所を調べて見ると、
矢は西の方の小さな花の上に落ち、
乳のように白かったその花を、恋の痛手で紫に染めてしまった、
乙女たちはその花を惚れ草と呼んだ。

―(中略)―

その花の汁を眠ったまぶたに塗っておくと、
男も女も、目が覚めて一番最初に見た相手に
ぞっこんになってしまうのだ。

Yet marked I where the bolt of Cupid fell.

It fell upon a little western flower,

Before, milk-white; now purple with love's wound:

And maidens call it 'love-in-idleness.'

.....

The juice of it on sleeping eyelids laid

Will make or man or woman madly dote

Upon the next live creature that it sees.

(2.1.165-68, 70-72)

* かつこ内注記の詩行数が原文の詩行数から変更されていることに注意。

■これまでの例で、大抵の場合は、対応が可能なはずである。その他の場合については、*MLA Handbook* (7th Edition) の “3.7.5. Ellipsis” を参照のこと。

7.4. 「典拠明記」と「かつこ内注記」

■卒論を書くためには先人の業績を参考にする必要があるが、実際に本文あるいは注で先人の業績に言及するときには、その情報をどこから引きだしたのかを明確にしなければならない。この手続きを「典拠明記」と呼ぶ。典拠明記を怠ることは、他人のアイデアをまるで自分のアイデアのように提示することに等しい。それは、「盗用」という論文作成上の違反行為であり、「アカデミック・オネスティ(学問的誠実性)」の精神に反する行為である。先人の業績に敬意を払うためだけでなく、盗用の疑いを避けるためにも、典拠明記は確実に行う必要がある。(盗用については、*MLA Handbook*(7th Edition)の “2. Plagiarism and Academic Integrity” を参照せよ。また、アカデミック・オネスティについては、履修要覧(共通編)の「ガイドページ」にある「アカデミック・オネスティ(学問的誠実性)の涵養と遵守」、および「レポートや論文作成の上で守るべき引用の方法について」を参照せよ。) 盗用が発覚した場合、試験におけるカンニング行為と同様に、重く処罰されることになるので、くれぐれも注意すること。

■典拠明記の方法は、かつこを用いて出典情報を示す「かつこ内注記」である。論文の読者は、かつこ内注記を手がかりにして、引用文献の中から当のアイデアの出典情報を特定するのである。(なお、注における典拠明記の方法は、本文における典拠明記の方法と少々異なる。詳しくは、本稿の「8. 注」を参照せよ。)かつこ内注記の方法は、出典の原文を引用しない場合とする場合とで異なる。

7.4.1. 出典の原文を引用しない場合

■出典の原文を引用しない場合、かつこ内注記の表記方法は次の通り。出典を示すべき情報がある文の末尾に、半角丸かつこ＋出典の著者の姓＋半角スペース＋出典のページ番号＋半角丸かつこ＋句点

『リア王』に登場する道化は、王権そのものの対極にある道化としてでてくるので名前が無くてもよい(山口 101)。

(山口 101)というカッコ内注記は、この文のアイデアが山口という著者の書物の 101 ページから得られていることを示している。読者は、この書物についてより詳しく知りたい場合に、引用文献の中から山口という名前を探し、より詳細な出典情報を得ることができる。(引用文献については、「8. 引用文献」を参照のこと。)

■文中で出典の著者名が挙げてある場合、カッコ内注記にはページ番号だけを記す。

山口昌男によれば、『リア王』に登場する道化は、王権そのものの対極にある道化としてでてくるために名前を持たない(101)。

■引用文献に出典の著者の書物が 2 冊以上挙げてある場合、カッコ内注記には出典の書名の短縮形を示す。表記方法は次の通り。半角丸カッコ＋出典の著者の姓＋読点＋2 重鉤カッコ＋出典の書名の短縮形＋2 重鉤カッコ＋半角スペース＋出典のページ番号＋半角丸カッコ

『リア王』に登場する道化は、王権そのものの対極にある道化としてでてくるので名前が無くてもよい(山口、『道化』 101)。

7.4.2. 出典の原文を引用する場合

■出典の原文を引用する場合、カッコ内注記は引用文の直後に付す。短い引用の場合には、次のようになる。

ワットは、フィールディングが「新古典主義の文学的伝統」(“neo-classical literary tradition”)(Watt 239)に属する作家であることを強調している。

■長い引用の場合、引用文末尾のピリオドとカッコ内注記のあいだに半角スペースを入れる。

ある批評家は、『嵐が丘』について次のように述べている。

古いことわざに、夜、トーストしたチーズを食べた者は魔王の夢を見るというものがある。『嵐が丘』の作者はあきらかにトーストしたチーズを食べてしまったのだ。このような作品を書いた作者が章を書きおえないうちに自殺しなかったことが不思議である。

There is an old saying that those who eat toasted cheese at night will dream of Lucifer. The author of *Wuthering Heights* has evidently eaten toasted cheese. How a human being could have attempted such a book as the present without committing suicide before he had finished a dozen chapters, is a mystery. (Leader 33)

- 文学作品の典拠明記およびかっこ内注記の詳細については、*MLA Handbook*(7th Edition)の“3. 7. 2. Prose”、“3. 7. 3. Poetry”、“3. 7. 4. Drama”を参照せよ。

8. 注

- 注とは、本文の中に盛り込みきれないコメントや説明など、補足情報を提供する部分である。

8.1. 注のつけ方

- 表記方法は次の通り。本文で補足をつけたい場所(たいていの場合は、文末、すなわち句点の直後)に上付の算用数字(半角)を付す。そして、注のページで、左端から半角5文字分を空けて対応する算用数字(半角)を記し、さらに全角1文字分を空けて補足情報を書く。なお、補足情報を書く際、2行目以降は字下げしない。詳しくは、「卒業論文の見本」の該当箇所、および *MLA Handbook*(7th Edition)の“6. 5. Using Notes with Parenthetical Documentation”を参照せよ。

9. 引用文献

■引用文献とは、本文中で実際に言及した原典の書誌情報の一覧である。参考にしただけの著作物は、この一覧に含めてはならない。以下、日本語の著作物について書誌情報の記載方法を説明する。外国語の著作物の記載方法については、*MLA Handbook*(7th Edition)を参照すること。

■引用文献を作成する際には、下記の順序に従って書誌情報を記載する。

1. 著者名
2. 書物の一部の名称(論集に収められた論文の表題等)
3. 書名
4. 編者、訳者、編纂者名
5. 使用した版
6. 使用した巻番号
7. シリーズの名称
8. 出版地名、出版社(者)名、出版年
9. ページ番号
10. 書誌を補足する情報・注釈

■書誌情報を記載する際、1行目は左端から書き始め、2行目以降は半角5文字分を字下げしてから書き始める。「Word」を使用している場合は、「ぶら下げインデント」の機能を用いるとよい。

■以下、書誌情報の基本的な形式を列挙する。

9.1. 単著の書物

■最も基本的な形式で、表記方法は次の通り。著者名+半角スペース+書名+半角スペース+出版地名+読点+出版社名+読点+出版年+句点

安西徹雄 『この世界という巨きな舞台—シェイクスピアのメタシアター』
東京、筑摩書房、1988年。

*副題の前には、ダッシュ(—)を置く。文字入力時に「ダッシュ」と打てば、変換候補の中に出てくる。

9.2. 論文集、アンソロジー、編纂物

■編者または編纂者の名前を最初に記載し、その直後に「編」を付す。

中谷猛・足立幸男編 『概説西洋政治思想史』 京都、ミネルヴァ書房、1994年。

9.3. 論文集、アンソロジー、編纂物の中の論文および作品

■論文名・作品名は書名よりも先に記載し、また、編者名・編纂者名は書名と出版地名のあいだに記載する。最後に、論文名・作品名の該当ページ番号を記載する。

柴田平三郎 「神と人間の調和—トマス・アクィナス」 『概説西洋政治思想史』 中谷猛・足立幸男編 京都、ミネルヴァ書房、1994年、57-68ページ。

9.4. 同一著者による複数の書物

■同一著者による複数の書物を引用文献に挙げる場合、最初の見出しにだけ著者名を記載する。2冊目以降の見出しでは、本来ならば著者名を記載すべきところに、ハイフンを3つ+ピリオド+半角スペースを置き、その後に書名を続ける。

安西徹雄 『この世界という巨きな舞台—シェイクスピアのメタシアター』
東京、筑摩書房、1988年。
--- 『シェイクスピア劇400年—伝統と革新の姿』 NHK ブックス 483
東京、日本放送出版協会、1985年。

9.5. 共同執筆の書物

■著者が2人の場合、書物に記載されている順序に著者名を記載する。その際、読点で区切る。

沢本元治、木谷慎也 『19世紀黒人文学』 東京、学究書房、1967年。

■著者が3人以上の場合、先頭に記載されている著者名のみ記載し、その直後に「他」を付す。

渡部昇一他 『論文・レポートの書き方』 スタンダード英語講座 8 東京、
大修館書店、1984年。

9.6. 団体が著者である書物

- 学会、協会、委員会、研究会など、団体が著者であるとき、団体名を著者名として記載する。

関東チョーサー研究会 『「カンタベリー物語」における語り』 東京、学究
書房、1985年。

9.7. 参考図書の中の記事・論文

- 百科事典の記事や辞書の項目は、論文集やアンソロジーの中の作品と同様に扱うが、参考図書の編集者名、出版地名、出版社名は記載しない。

「シェイクスピア」 『平凡社世界大百科事典』 1988年。

9.8. 序文、はしがき、まえがき、あとがき、解説

- 序文、はしがき、まえがき、あとがき、解説等を記載する場合、その著者名の次に引用箇所名を記載する。その際、かっこに入れたりしない。また、出版年の後に読点を置き、該当ページ番号を記載する。

安西徹雄 はしがき 『英語の発想』 東京、ちくま学芸文庫、2000年、9-13
ページ。

9.9. 版(Edition)

- ある作家の死後に全集が編纂されたりすることがある。例えば、2000年に印刷された三島由紀夫の『仮面の告白』は、三島が出版準備をしたわけではない。ある編者が、生前に出版されていた版に本文校訂を加えたり、序文を書いたり、解説を述べたりしたものである。つまり、この2000年に出版された『仮面の告白』は、「版」と呼ばれることになり、編者名を三島の名とともに記載する。

三島由紀夫 『仮面の告白』 『決定版三島由紀夫全集 1』 田中美代子編 第
2 版 東京、新潮社、2000 年。

9.10. 翻訳

■外国語の原書が入手不可能で、翻訳書を記載する場合、その作品自体に言及するのなら、著者名を先に記載する。外国語の名前の表記は、「姓、名」とし、日本人の場合は「姓名」と読点なしで表記する。引用文献では、最初に外国語の書物をアルファベット順に並べ、その後続けて日本語の書物を 50 音順に並べる。

クルツィウス、E. R. 『ヨーロッパ文学とラテン中世』 南大路振一他訳
東京、みすず書房、1971 年。

スミス、バーバラ 「黒人フェミニズムにむけて」 『新フェミニズム批評
—女性・文学・理論』 エレイン・ショーウォーター編 青山誠子訳
SELECTION 21 東京、岩波書店、1990 年、195-225 ページ。

■翻訳者の解説やあとがきなどを記載する場合は、翻訳者名を最初に記す。

青山誠子訳 訳者あとがき 『新フェミニズム批評—女性・文学・理論』 エ
レイン・ショーウォーター編 SELECTION 21 東京、岩波書店、1990
年、415-20 ページ。

9.11. 第 2 版またはそれ以降の版の書物

■記載する書物が第 2 版や改訂版ならば、その情報も記載する。版の情報は出版地の直前に入れる。

田中美代子編 『決定版三島由紀夫全集 1』 第 2 版 東京、新潮社、2000
年。

9.12. 複数巻の著作物

- 全巻の出版年が同じ場合、全巻まとめて記載する。

ハイエット、ギルバート 『西洋文学における古典の伝統』 柳沼重剛訳
上下巻 筑摩叢書 141 東京、筑摩書房、1969 年。

- 全巻の出版年が数年にわたっている場合は、次のように記載する。

マキアヴェルリ 『ローマ史論』 大岩誠訳 全3巻 東京、岩波書店、
1949-50 年。

- 複数巻の著作物のうち、特定の巻のみを用いたい場合は、引用文献にその巻番号を記載し(例:第2巻)、その巻の情報のみを記載する。そうすることによって、論文の本文中でその作品に言及するとき、ページナンバーのみを記載すればよいことになる。

マキアヴェルリ 『ローマ史論』 大岩誠訳 第2巻 東京、岩波文庫、
1949 年。

9.13. 定期刊行物(学術雑誌、一般雑誌、新聞等)の記事

- 巻全体で通しのページ番号が使用されている雑誌の場合、次のようになる。

吉岡拓朗 「『ハムレット』における亡霊」 『英米思想』 第23号(1997
年)、23-39 ページ。

- 各号で独立したページ番号が使用されている雑誌の場合は、次のようになる。

鈴木建雄 「19世紀英文学にみられるギムナジウムの表象」 『英米文学
研究法』 第30巻 第5号(1991年)、145-67 ページ。

9.14. DVD 等

- DVD 等による映画の情報は、次のようになる。

『七人の侍』 監督 黒沢明 配役 三船敏郎、志村喬他 1951年公開

DVD 東宝、1968年。

9.15.インターネット上の情報

■専門的学術論文データベースや学術記事等の資料を集めたデータベースなどを除き、一般にインターネット上の情報は、玉石混淆のため、引用文献として用いるのはできるだけ避けた方がよい。やむを得ない場合は、下記の例や、*MLA Handbook*(7th Edition)の“5. 6. Citing Web Publications”を参照すること。

■上智大学の図書館のウェブサイトのデータベース (JSTOR や Project Muse 等)で検索した、定期刊行物収録の学術論文の場合は、次のようになる。

Tolson, Nancy. “Making Books Available: The Role of Early Libraries, Librarians, and Booksellers in the Promotion of African American Children’s Literature.”
African American Review 32. 1 (1998): 9-16. JSTOR. Web. 5 June 2008.

■新聞等の定期刊行物のウェブサイトに掲載されている記事の場合は、次のようになる。

Dean, Cornelia. “Executive on a Mission: Saving the Planet.” *New York Times*.
New York Times, 22 May 2007. Web. 25 May 2015.

■出版社のウェブサイトのアーカイブに掲載されている作家のインタビューの場合は、次のようになる。

Antin, David. Interview by Charles Bernstein. *Dalkey Archive Press*. Dalkey
Archive P, n.d. Web. 21 Aug. 2015.

付録①

2017 年度卒業論文注意事項

2017年3月

<2017年度卒業論文 注意事項>

卒業論文は、春学期3単位、秋学期3単位となります。卒論指導は、ひとりの学生につき、ひとりのメンターによっておこなわれますが、英文学科では、卒業論文の単位取得に必要な注意事項を設けます。以下の項目を熟読し、ルールに従って当該科目を履修するようにしてください。

【執筆にあたっての注意事項】

1. 3月末日の在校生ガイダンス時に各メンターが顔合わせを兼ねて卒論のイントロダクションをおこなうので、必ず出席し、連絡先や論文のテーマ等に関する変更事項があれば、メンターに伝えること。
2. 4、5、6、7月の4ヵ月間は、最低月1回、個人面談を受ける。
3. 面談の方法や提出物の詳細については、各メンターの指示に従う。
4. 「卒業論文のプロポーザル」と第一章の草稿（日本語論文の場合は5,000字程度、英語論文の場合は2,500 words程度）*は、6月26日（月）～6月30日（金）に学科事務室に提出すること。
注意：学科事務室の受付時間は、10:00-11:30；13:30-17:00。
5. 上記4項目の規定を守らなかった場合は、春学期の単位は認定されない。春学期の単位を取得できなかった者は、秋学期の登録をおこなってはならない。翌年の春学期から再度受講し直すこと。
6. 秋学期に関しても、面談、添削を受けていない場合は評点Fとする。
7. 論文のフォーマットについては、*MLA Handbook*（7版）と、英文学科で作成した『卒業論文の手引き』を参照する。
8. 論文執筆にあたり、剽窃は決しておこなわない。
9. 英語で論文を執筆した者も、日本語で論文を執筆した者も、口頭試問の際に、論文の要約を英語で暗唱して発表することが要求される（200 words程度）。要約の英文チェックを教員に依頼する必要はない。

*ただし、5,000字で1～3章の草稿を求める教員もいる。

付録②

「卒業論文題目届」の見本

卒業論文題目届（見本）			
学生番号		氏名	アルファベット：

e-mail アドレス：			
<題目> 現在決まっている範囲でできるだけ詳しく書く（英語で書く人は英語で）。			
用 語	英語	日本語	（○で囲む）

提出日時： 2月26, 27, 28日 10:00～17:00（例）

提出先： 7号館5階 英文学研究室

付録③

「卒業論文計画書」の見本

卒業論文計画書

学籍番号		名前(漢字とローマ字で)	
メールアドレス			
言語(英語・日本語)			
作家・作品*			
論文タイトル			
教育実習の予定			

*英語学・英語教育関係について書く場合は、作家・作品名は書かなくてもよい。

テーマをできるだけ詳しく**文章**で書くこと(英語で卒論を書く場合は、下記も英語で記入すること)。

最低 3 分の 2 は書くこと。

使用予定の参考文献を最低 5 本挙げること(そのうち 3 本は英語書籍・英語論文とする)。テーマに関係のある文献を書くこと。文献の書式は *MLA* (7th edition) に拠る。

付録④

「卒業論文のプロポーザル」の見本

2017年6月26日

A1288729

紀尾井花子

卒業論文のプロポーザル（見本）

(1) 卒業論文

(a) タイトル

『嵐が丘』における自然、超自然、魂の世界」

(b) Thesis Statement

『嵐が丘』をロマンティックな「恋愛小説」だと考える読者は多い。また、この作品をロマン主義的な感受性の顕れと捉える批評家も少なからず存在する（具体例としては、〇〇、〇〇が挙げられる）。しかし、『嵐が丘』はロマン主義的な「恋愛小説」などではないのではないだろうか。本論文では、『嵐が丘』を同時代の英文学史の文脈に位置づけた上で、この作品が、同時代にみられたロマン主義、とりわけウィリアム・ワーズワースが提示したようなロマン主義的要素へのアンチテーゼを示す小説テキストであることを明らかにする。

(2) 第1章

(a) タイトル

「神秘的自然描写とワーズワース的自然観」

(b) Thesis Statement

第1章では、(i) 『嵐が丘』が出版された時代のイギリスで重要な位置を占めていたウィリアム・ワーズワースの自然観について明らかにした上で、(ii) 『嵐が丘』におけるヨークシャーのヒース（荒野）の自然描写が、ワーズワースが提示した自然観とは異なり、きわめて神秘的な要素を含んだ（たとえば、神が宿っているかのような描写がなされている）、特異なものであることを明らかにする。

(3) 第2章

(a) タイトル

「奇怪な舞台設定と登場人物」

(b) Thesis Statement

第 2 章では、『嵐が丘』における舞台設定と登場人物が奇怪なものであることを論証する。具体的には、(i)人里離れた田舎にある「スラッシュクロス」と呼ばれる屋敷が、幽霊が出現するような空間として設定されていること、(ii) ヒースクリフやキャサリンといった主要登場人物が、感情を剥き出しにする、理性を欠いた人物として造型されていることに着目し、その奇怪さについて明らかにする。

(4) 第 3 章

(a) タイトル

「『嵐が丘』における反ロマン主義的要素」

(b) Thesis Statement

第 3 章では、(i) ヒースクリフとキャサリンといった主要登場人物の二人の關係に肉体的な要素が描写されていないことに着目し、(ii) ここで強調される「魂」の世界が、ワーズワースたちロマン主義の詩人が目指した世界観とは異なるものであることを明らかにする。

(5) 参考文献

付録⑤

「卒業論文」（日本語論文）の見本

Nature, the Supernatural, and the Spiritual World
in *Wuthering Heights*

『嵐が丘』における自然、超自然、魂の世界

A Thesis

Presented to

The Department of English Literature

Sophia University

In Partial Fulfillment

of the Requirements for the Degree

Bachelor of Arts

by

Hanako Kioi

紀尾井花子

December 2016

目次

序論	1
第 1 章 神秘的自然描写とワーズワース的自然観	4
第 2 章 奇怪な舞台設定と登場人物	11
第 3 章 『嵐が丘』における反ロマン主義的要素	18
結論	25
注	28
引用文献	29

序論

19世紀初頭、エミリ・ジェーン・ブロンテ(Emily Jane Brontë, 1818-48)の『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)¹が世間に発表されたとき、多くの読者はこの作品に嫌悪感を示し、イギリス文学の異端児として扱った。ラファエロ前派の画家であり、詩人でもあったD. G. ロセッティ(D.G. Rossetti, 1828-1882)は、「舞台は地獄だ—ただその場所と人物に英語の名前がついているだけのようと思われる」(“The action is laid in Hell,--only it seems place and people have English names there”)(Rossetti 224)と友人への手紙に記し、また、F. R. リーヴィス(F. R. Leavis)は、この作品を、イギリス文学の「突然変異」(“sport”)(38)と名づけた。1848年に『グレアムズ・マガジン』(*Graham's Magazine*)に掲載された書評は、当時の人々の戸惑いが非常に大きかったことを示している。

古いことわざに、夜、トーストしたチーズを食べた者は魔王の夢を見るというものがある。『嵐が丘』の作者はあきらかにトーストしたチーズを食べてしまったのだ。このような作品を書いた作者が12章を書きおえないうちに自殺しなかったことが不思議である。

There is an old saying that those who eat toasted cheese at night will dream of Lucifer. The author of *Wuthering Heights* has evidently eaten toasted cheese. How a human being could have attempted such a book as the present without committing suicide before he had finished a dozen chapters, is a mystery.
(Leader 33)

また、エミリの死後、『嵐が丘』を検閲した姉シャーロット・ブロンテ(Charlotte Brontë, 1816-55)は、この作品につけた序文の中で、この作

第3章

『嵐が丘』における反ロマン主義的要素

第1章と第2章で『嵐が丘』の特異性について論じてきたが、それらの特異性は、エミリが描くテーマを効果的に提示するための演出のひとつであったことは前述のとおりである。では、『嵐が丘』のテーマは何か。神が宿っているかのような自然描写、奇怪な幽霊、感情を剥き出しにして生きる登場人物たち—これらの特徴を通してエミリは何を伝えたかったのだろうか。『嵐が丘』において一見して印象的なのは、ヒースクリフとキャサリンの激しい愛憎劇である。そのため、読者はこの作品のテーマを「ヒースクリフとキャサリンの激しい恋愛」とであると考えがちだ。しかし、この作品のテーマを単に恋愛とするのは、必ずしも的を射ているとは言えない。なぜなら、エミリは彼女の詩の中で、富や名誉とともに、「愛なんて嘲笑してしまう」(“love I laugh to scorn”)(Brontë, *The Complete Poems* 163)と言っているからである。『嵐が丘』の恋愛を中心とする筋から考えると、エミリが恋愛を重視していると思われるかもしれないが、この詩から考えると、彼女が恋愛に対して必ずしも肯定的な態度をとっていなかったことがうかがえる。では、エミリの恋愛に対する見解には特別なものがあるのだろうか。

『嵐が丘』の恋愛で注目すべきことは、いわゆる恋愛小説の恋愛とは異なった風に描かれていることである。その特徴のひとつとして挙げられるのは、理性が大幅に欠如していて、相手のすべてを求め合う激しい愛にもかかわらず、肉体関係がまったく描かれていないことだ。なぜエミリはこれほど愛し合うキャサリンとヒースクリフにそのような関係をもたせなかったのだろうか。概して、ヴィクトリア時代の文学では、激しい恋愛が描かれた作品は少なく、まして肉体関係を描いたものはほとんどなかった(岡本 383; 真田 125)。『嵐が

注

1 本論文中、『嵐が丘』への言及は Emily Brontë, *Wuthering Heights*, ed. William M. Sale, Jr., 3rd ed. (New York: Norton, 1963)に拠る。

2 宮福紀子は、『嵐が丘』は、根本的には略奪と復讐のバイロン風物語ではなく、むしろ何ものを超越した、死にも負けない物語であると述べている(29)。

3 カミーユ・パーリア(Camille Paglia)は、『嵐が丘』では、エミリの姉マリアへに対するレズビアン的な愛情が、登場人物の「近親相姦」というテーマとなって描かれていると述べている(76)。

4 テリー・イーグルトン(Terry Eagleton)は、『嵐が丘』をマルクス主義的な見地から分析し、テーマを「自然と文化の関係」とし、ヒースクリフは「自然」、スラッシュクロス屋敷は「文化」を表わし、最終的にヒースクリフが死ぬことによって、「自然」の敗北が暗示されていると述べている(135)。

5 『嵐が丘』の中だけではなく、エミリの詩の中でも、自由を求める詩は数多く存在する。Brontë, *The Complete Poems*, 55, 92, 162, 163 を見よ。

引用文献

- Allott, Miriam. *The Brontës: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1995. Print.
- Bolting, Fred. *Gothic*. London: Routledge, 1996. Print.
- Brontë, Emily. *The Complete Poems of Emily Jane Brontë Edited from the Manuscripts*. Ed. C. W. Hatfield. New York: Columbia UP, 1995. Print.
- . *Wuthering Heights*. Ed. William M. Sale, Jr. 3rd ed. New York: Norton, 1963. Print.
- Cavaliero, Glen. *The Supernatural and English Fiction*. Oxford: Oxford UP, 1995. Print.
- Chitham, Edward. *A Life of Emily Brontë*. Oxford: Blackwell, 1987. Print.
- Eagleton, Terry. *Heathcliff and the Great Hunger: Studies in Irish Culture*. London: Verso, 1995. Print.
- Garofalo, Daniela. "Impossible Love and Commodity Culture in Emily Brontë's *Wuthering Heights*." *ELH* 75 (2008): 819-40. Print.
- Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. London: Smith, Elder, 1885. Print.
- Lauber, John. *Sir Walter Scott*. New York: Twayne, 1966. Print.
- Leader, J. G. "On *Wuthering Heights*." *Graham's Magazine* 27.2 (1848): 32-35. Print.
- Leavis, F. R. *The Great Tradition: George Eliot, Henry James, Joseph Conrad*. New York: New York UP, 1963. Print.
- Paglia, Camille. *Sexual Personae: Art and Decadence from Nefertiti to Emily Dickinson*. New Haven: Yale UP, 1990. Print.
- Rossetti, D. G. *Letters of Dante Gabriel Rossetti*, Ed. O. Doughty and R. J. Wahl. Vol. 1. Oxford: Clarendon P, 1965. Print.
- Wordsworth, William. *Selected Poetry and Prose*. Ed. Philip Hobsbaum. London:

Routledge, 1989. Print.

ウィルクス、ブライアン 『ブロンテ—家族と作品世界』 白井義昭訳 東京、彩流社、1994年。

岡本成蹊 『イギリス近代小説の形成』 東京、桐原書店、1975年。

真田時蔵 『エミリ・ブロンテ』 東京、北星堂書店、1999年。

宮福紀子 「エミリ・ブロンテ—荒野を駆ける」 『英国ロマン主義作家』 第28巻 第3号 (2005年)、15-32。

付録⑥

「卒業論文」(英語論文)の見本

The Subversion of Gender Roles in Shakespeare's *Macbeth*

『マクベス』におけるジェンダーロールの転覆

A Thesis

Presented to

The Department of English Literature

Sophia University

In Partial Fulfillment

of the Requirements for the Degree

Bachelor of Arts

by

Taro Kioi

紀尾井 太郎

December 2016

Contents

Introduction	1
Chapter 1 Shakespeare and Early Modern Gender	5
Chapter 2 Lady Macbeth's Domination	17
Chapter 3 Rejection of Transgender Roles	27
Conclusion	32
Notes	34
Works Cited	35

Introduction

Modern scholars often identified Shakespeare's plays "as a site of women's repression¹—evidence of women's subordinate place in his own world and an influential means to validating that subordination for future generations" (Rackin 48), and therefore "Shakespeare has been the focus of considerable disagreement among feminist critics" (Williamson 17), with Juliet Dusinberre's *Shakespeare and the Nature of Women* in 1975 at the head. While some critics like Dusinberre and Irene Dash see Shakespeare as a proto-feminist, others, like Marilyn French and Paula S. Berggren, argue that his perspective is that of a dominant man.

Feminist critics on either side of the debate tend to "employ universal models of male and female" (Williamson 17) and they rarely relate them to historical background. McLuskie points out that the problem with this "essentialist model" of feminist criticism is that it "obscures the particular relation between Shakespearean drama and its readers which feminist criticism implies" (91). Considering that drama may reflect the society, these literary texts should be discussed in relation to their background.

Jean Howard argues that a literary work has "an initiatory role in cultural transformations or social struggles" and "the possibility that literature could have an effect on other aspects of the social formation, as well as being altered by them" (*Stage* 47). She takes up a scene from Shakespeare's *Much Ado About Nothing* (1598) as an example of reinforcement of male dominance. In the third act of the play, the villain Don John manipulates the heroine's maid, Margaret, to substitute for the heroine Hero to cause Claudio to break his engagement with Hero. This scene "assumes and further circulates the idea that women are universally prone to deception and impersonation," which is "a cultural construction of the feminine. . . which serves the political end of

justifying men's control and repression of the volatile and duplicitous female” (Howard *Stage* 61). In other words, the play reflects the assumption that women are inconstant and reinforces it to ensure men's dominance over women. On the assumption that the real world and Shakespeare's plays are closely related to each other, this thesis will examine his play in relation to English society in the late sixteenth and early seventeenth centuries.

The purpose of this study is to specify that the moral of *Macbeth*² is that women should not usurp men's sphere, or blur the boundary between genders, and that Shakespeare reinforces the principle of male dominance over women in the play. *Macbeth* is generally thought to have been performed for the first time in 1606 for King James I to entertain king of Denmark Christian IV (1588-1648), James' brother-in-law (Nostbakken 121, Takatsuki 132).

Chapter 3

Rejection of Transgender Roles

In the climax of *Macbeth*, Macduff, a father who has lost his children under Macbeth's tyranny, avenges their slaughter on Macbeth. Macduff cries, "He has no children" (5.1.216) in his lamentation for the death of his children to denounce Macbeth's pitilessness. A child, in relation with gender, is another key factor of the play through which it presents positive qualities. The purpose of the first part of this chapter is to show that children are a symbol of humanity and the future, and to see in what ways Macbeth and Lady Macbeth deny or are being denied what a child signifies. The final part will focus on the complex cross-gender issues in the character of Lady Macbeth in text and on stage.

Children are referred to many times in several different forms in the play. They sometimes appear as a character, such as Macduff's child, sometimes as "a symbol, like the crowned babe and the bloody babe which are raised by the witches on the occasion of Macbeth's visit to them" (Brooks 39), and sometimes as a metaphor as in "a naked new-born babe" of pity. The babe signifies the emotional ties and "human compassion" which make a man human (Brooks 46). Men who have children are therefore men of humanity and morals, which makes them better men in the Renaissance definition than Macbeth, who is pitiless and full of cruelty. Kahn points out that most of the male characters in the play have children, and they take action to sustain "the natural and the social order" (175) with and for them. Brooks aligns his argument with that of Kahn by stating that the existence of a child "testifies to the force which threatens Macbeth and which Macbeth cannot destroy" (45).

The babe also signifies the future which Macbeth wishes to control but cannot

Notes

1 Thomas Neely, for example, argues that Shakespeare's plays reflect the misogyny of the sixteenth- to seventeenth-century English society (25).

2 Quotations from the play are taken from William Shakespeare, *Macbeth*, ed. Nicholas Brooke (Oxford: Oxford UP, 2008).

3 Quotations from the play are taken from William Shakespeare, *The Taming of the Shrew*, ed. H. J. Oliver (Oxford: Oxford UP, 2008).

Works Cited

- Belsey, Catharine. "Disrupting Sexual Difference: Meaning and Gender in the Comedies." *Alternative Shakespeares*. Ed. John Drakakis. 2nd ed. London: Routledge, 2002. 169-93. Print.
- Berggren, Paula. S. "The Woman's Part: Female Sexuality as Power in Shakespeare's Plays." *The Woman's Part*. Carolyn Ruth, et al., eds. Urbana: U of Illinois P, 1980. 17-34. Print.
- Biggins, Dennis. "Sexuality, Witchcraft, and Violence in *Macbeth*." *Shakespeare Studies* 8. 69(1976): 255-77. Print.
- Brooks, Cleanth. *The Well Wrought Urn*. New York: Harvest, 1947. Print.
- Brown, Meg Lota. *Women's Roles in the Renaissance*. Westport, CT: Greenwood, 2005. Print.
- Clark, Sandra. "'Hic Mulier,' 'Haec Vir,' and the Controversy over Masculine Women." *Studies in Philology* 82. 2 (1985): 157-83. Print.
- Dusinberre, Juliet. *Shakespeare and the Nature of Women*. 3rd ed. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2003. Print.
- Freedman, Estelle. *No Turning Back: The History of Feminism and the Future of Women*. New York: Ballantine, 2002. Print.
- French, Marilyn. "Power/Sex." *Power/Gender: Social Relations in Theory and Practice*. London: Sage, 1994. 15-35. Print.
- Howard, Jean. E. "Crossdressing, the Theatre, and Gender Struggle in Early Modern England". *Shakespeare Quarterly* 39. 4(1988): 418-40. Print.
- . *The Stage and Social Struggle in Early Modern England*. London: Routledge, 1993. Print.